# 『人新生の「資本論」』から学ぶ

「蝶の雑記帳 114」

「後生畏るべし」というのが友人の口癖である。若い人の異なる見解にも耳を傾ける度量を示して、古い考えに固執するわたしを矯正してくれる。最近わたしは、その孔子のことばの真理であることを、斎藤幸平著『人新生の「資本論」』を読んで実感した。書物のタイトルに関心をもったのだが、たまたまテレビの番組でヨーロッパの学者と討論しているのを見て、その姿勢が真剣であることに好感を抱いた。読む価値があると考えて読み、実際、大いに教えられるところがあった。読んでもう半年になるが、それを見なおして頭を整理することにしよう。

＊

産業革命以来の人類の活動が地質に痕跡を残すほどの規模になって、地質年代の名を今の「完新世」から「人新世」へと変更することが検討されている。「人新世」ということばはまだ十分周知のものとなっていないが、「地質としてその痕跡を見ることができる将来まで人類の文明が生き残れるか」と問うてみれば、重大な問題であることが分かる。しかし新造語「人新世」は、地質年代と聞いて思い浮かぶような時間スケールともちがい、異質な問題を提起している。最近 250 年間の人間活動の規模の大きさを具体的にグラフに

表わせば、子や孫が生きているうちに人類の生存条件を変えるほどさしせまった緊急の重大問題であることが判明する。わたしたちの世代が生き方を変えることを要求されている、と受けとめなければならない。

人新生の問題は現在当面している問題である。それも、経済から政治まで、文化活動から日常生活まで、人間の社会のすべての面がかかわる重大問題と考えなければならない。しかし、このように緊急性だけを言い立てるばかりで、有効な行動を起こすのでなければなんにもならない。

昔、農業を生産基盤とする時代、武力によって耕作者と農地とを支配するようになった社会では、支配者が農業生産物の一部を直接取得して政治を行ない、世の中が動いていた。そのときにも、生産物は農産品だけではなく、自然物を加工するさまざまな生産物があった。それらの生産物を世の中の人々にいきわたらせることは、政治的な支配だけではできない。古代から貨幣がつくられたことがそれを教える。だから、生産物の流通は貨幣を媒介に行なわれた。そこには原初的に「資本」の動きがあった、と言うことができる。古代から大商人がいたことがそれを証言する。古代中国の為政者は、世の中の政治経済的な運営を「経世済民」と呼んだ。理想にとどまるけれども、「世の中を（よく）経営し、民を済（すくう）」という意味である。現代、経済ということばはヨーロッパ流に使われるが、漢字表記の「経済」のもとの意味が「経

世済民」だということをいつも思い出す必要がある。

これを思いおこせば誰しも、現代の資本制の社会が古代東アジアの理念「経世済民」からどれだけかけ離れているか、感慨を起こさずにはおれないだろう。

＊＊

思考を起動させるためにことばを紡ぎ始めてみたが、ありきたりの文章にすぎない。老人のたどたどしい思索に対して、行動的な斎藤幸平は、問題の核心を究明し、何を改めるべきかを提言する。それに耳を傾けることにしよう。

斎藤幸平は、「人新生」を「人類の経済活動が全地球を覆ってしまい、外部を使いつくした世」と表現する。そして、「地球は有限だから、資本の力では克服できない限界が存在する」という誰にも否定できない真理を確認する。その確認は、「無限の経済成長を目指すことはできない」という判断へ導く。現在、技術楽観論、あるいはグリーン・ニューディールや脱物質化社会などの標語で、この困難をなんとか打開しようとする解決策が提案されているが、問題の核心を見すえれば、われわれには「脱成長という選択肢しかない」というのである。

そうして改めて、現代社会を動かしている資本主義を見つめる。資本主義の本質は、資本を運用して経済活動をして、資本を増殖させることである。資本の増殖だけがめざされれ

ば、運搬・生産・消費などの物質循環で生じるすべてのゆがみは無視され、その過程で人間は被害さえこうむる。資本の循環だけに注目すれば、自然と人間がこうむるそれらの困難は外部的なことと見なされる。つまり、資本主義の活動は「外部化と転嫁に依拠して」なされるのである。斎藤幸平は、そのやり方では「グローバルな公正さを実現できない」、だから「人類全体の生存確率が低くなっている」のだ、と言う。

人間にとってほんとうに重要なのは、資本の循環の外部に存在する自然や人間とその社会である。自然や人間が危機にさらされている人新生をこのようにとらえれば、「無限の経済成長を目指す資本主義に、今、ここで本気に対峙しなくてはならない」のである。

「資本の定義からして、資本主義と脱成長は両立しえないこと」を確認した上で、斎藤幸平は、脱成長の経世済民をめざすべきことを提言する。資本主義を脱却した「脱成長」は、気候変動問題に現われている「人新生」を制御でき、「自由、平等、公正」を維持できる社会でなければならない。それは理想だけれども実現困難なことだ、と世慣れた人は言うかもしれない。しかし、これからの世代にはそれを打開するのでなければ未来はないのである。

打開策はそこらにころがっていて簡単に見つかるものではない。斎藤は真剣に、産業革命以来の近代の経世済民を見つめ直し、歴史をふりかえって可能な活動を探す。資本主義

をほんとうの意味でラディカルに批判しようとする。しかし、そこからまったく新しい方策が出てくるわけではない。過去の歴史においてそういうことは起きなかった。

冷戦が終わってマルクス主義的共産主義は終わった、と言われている。ところが、あれから一～二世代が交代して今日の世界を見れば、世界の政治・経済・社会の状況は本質的には変わっていないことが分る。マルクスが改善しようとした資本制社会の矛盾は何も変わっていない。若い学究の徒は、マルクスが考えたこと全部を調べ直す。そして、マルクスの考察には展開があって、まだよく知られていない考え方に進んでいたことを見出す。晩期マルクスの思想には、人新生の時代に人類の直面している問題に立ち向かう考え方がある、というのだ。しかもこの人は、マルクスと同じく単に学究にとどまらず実践家を志す。資本主義の考え方から自由になって、「脱成長」社会を提唱しそれを模索する活動に参加しようとする。ぬるま湯に浸って衰微するのにまかせている現在の日本社会で貴重な存在である。

＊＊＊

第四章は、マルクスの思想を、人類が直面している多難な人新生に立ち向かう思想として立て直そうとする。斎藤幸平の言うところを聞こう。

最初に、マルクスの「コミュニズムが一党独裁と国営化の体制をさすものでなかった」ことを確認する。それは、「生

産者たちが生産手段を<コモン>として共同で管理・運営する社会のことだ」と。そして、人新生の時代に必須の「地球を<コモン>として管理する」という基本的な考え方を提示する。<コモン>ということばはこれまでも使われてきたが、人類が生存の危機に直面している人新生の時代には、「自然」や「文化」や「人間そのもの」を<コモンズ>ととらえて考えることが必要なのである。そうすれば、資本主義経済がそれらのかけがえのない<コモンズ>を食いつぶすように働いてきたことに気づく。

重要なのは、晩年のマルクスはこれまで主張されてきた“マルクス主義”から転換していた、と知ることである。それは、晩期に書かれた文書類を読み解けば判る。そこでマルクスは、“マルクス主義”にまといついていた「進歩史観」や「生産力至上主義」や「ヨーロッパ中心主義」から脱却しつつあった、というのである。

見落とされていたのは、『資本論』の基底にある考察の枠組み、「人間と自然の物質代謝」という世界の見方である、と斎藤幸平は考える。この「人間と自然の物質代謝」という見方には普遍的な広がりと深みがある、とわたしも思う。このいわば哲学的な問題は別の機会に考察してみたいと思う。

今は斎藤の著書の論旨に沿い、わたしなりに言葉を足しながら考えていこう。

「人間が自然と取り結ぶ関係は、ほかの動物とは異なる、

それが労働である」。人間の社会で労働は高度に社会化された活動としてある。労働は、蟻や蜂のような生得的な活動ではなく、わりあい高度な精神作用をもつ人間は互いの利害を勘定でき、その活動が社会をしだいに変化させる。しかも、社会のあり方とともに労働のあり方も変化する。長い人間の歴史をふりかえれば、そのことを知ることができる。そして、近代以来人間が目の当たりにしているのは、社会の経済的な成り行きを最も支配しているのは「資本」だということである。いわゆる資本制の社会である。

現代社会で生活している者は、抽象的な働きにすぎない資本」が社会を制していることを肌で知っている。「資本は自らの価値を増やすことを最優先し」、「人間も自然も徹底的に利用する」ことも。今や、「資本は人間と自然の物質代謝を大きく攪乱する」ほどになってしまい、「資本の無限の運動と自然のサイクルは相容れない」ことが明らかになった。「人新生」の世になって人間が直面しているのは、「その帰結」なのである。

斎藤は言う、「マルクスは『資本論』で、資本主義は物質代謝に修復不可能な亀裂を生み出す」と警告していた、と。さらに斎藤は、『資本論』以後のマルクスの考察の軌跡を研究し、現代の問題に立ち向かう思想を組み立て直そうとする。資本主義は、自然環境を破壊するほどになり、「最終的に資本主義を存続できなくする」。マルクスは、「だから、資本

主義での生産力上昇を追求するのではなく、別の経済システムすなわち社会主義に移行して、そのもとで持続可能な経済成長を求めるべきだ」と考えるようになった。「この生産力至上主義からの決別は、より大きな世界観である進歩史観をも揺るがす」、「史的唯物論はすべてがやり直しとなるのだ」と斎藤は考える。

晩年のマルクスが取り組んだのは、新しい「物質代謝論」で、「エコロジー研究」と「共同体研究」であった。とり上げて考察されたのは、歴史的に存在した環境を保全する共同体である。生産を持続可能にするために、土地と生産方法が共同体によって規制されていた。別の角度から見れば、そこでは平等主義が重んじられていた。「新しいコミュニズム」の基礎にはそういう特徴がなければならない。「大地＝地球を〈コモン〉として持続可能に管理すること」である。言い換えれば、「共同体社会の安定性」が重要だから、持続可能性を破壊する成長を放棄しなければならない。斎藤幸平は、それを「脱成長コミュニズム」と呼ぶ。「共同体的富」を共同で管理する社会をめざしているのである。

＊＊＊＊

斎藤幸平が畏るべき後生であることは、この新書の表題を『人新生の「資本論」』としたところに現われている。マルクスの『資本論』は、資本主義経済の機動力である「資本」の研究書である。しかし、『資本論』の重要さは、資本が社

会にもたらす弊害を克服するための社会運動理論の基礎に据えた点にある。斎藤幸平は、現代社会が直面する「人新生」の問題を克服するためにこの本を提出し、社会運動を呼びかけようとしているのである。西欧社会にくらべて社会運動の弱い現在の日本社会の状況に置いて見れば、それがたいへん勇気の要る行動であることが知られる。

社会主義がほとんど蔑視されるほどの社会で、世の中を変えるためにひるまずに「新しいコミュニズム」の運動を提言しているのだ。もう一度言えば、それは人類が直面する「人新生」の困難を克服するために必要なのである。

循環型の経済を提唱するのだが、ことばをオブラートで包まずに、端的に「脱成長のコミュニズム」と表現する。今や経済成長をめざすことが困難になったことをひるまずに受け入れよう、と呼びかけているのだ。コミュニズムということばを使うのもためらわない。「資本と対峙する社会運動を通じて、政治的領域を拡張していく必要がある」と考えるからだ。この四十年間にずるずると状況の移り変わった日本社会で聞くことが少なくなったが、この本は、現代の資本主義社会のかかえるさまざまな矛盾をあらためてもう一度説き起こす。

かつてのコモンズには、土地や水をはじめとする共有財があった。その「公富」が、資本の囲い込みによる「私富」の増大のせいで減少している。そのコモンをとりもどすのが

「コミュニズム」だ、と力説する。五十年前の日本社会にはその考え方があった。そういう考え方が希薄になったので、現代では、それらのことを再論する必要があるのだ。そして斎藤は、人新生の時代に立ち向かうためにも、コモンを再建することが必要なことを訴える。

第七章は、タイトルを「脱成長コミュニズムが世界を救う」として、人新生の現代社会の諸問題を解決するにはどうすればよいかを説く。斎藤幸平は、人間の生活と経済活動を根本からとらえようとする。「自然本来の循環過程」を見つめ、「マルクスにあった人間活動についての物質代謝論」にまでさかのぼる。「生産は自然の循環に合わせた」労働によって行なわれる。そこで、「労働は、人間と自然の媒介活動である」。だから、「肝心なのは、労働と生産の変革なのだ」。「労働のあり方を抜本的に変えようとしないなら、資本主義には立ち向かえない」。

そして、現代の諸問題をとりあげて考察し、どうすればよいを議論する。そのとき斎藤幸平は、マルクスにあった理想を追求する姿勢を受け継いで熱心に語る。人新生の世でただ一つ現実的である「脱成長」という経済を、包み隠さないことばで提案しながら、しかも「生活の質を向上させる」ことを目標として掲げる。

労働の生産性という問題も、人新生の世ではエネルギー資源とは切り離せない。生産の場で、現代のオートメーション

化とそれにともなう労働のあり方も再検討される必要がある。そこでは、「労働が個人の自己実現であるような」という理想が語られる。また、生産過程の民主化も必要である。生産において「コモン」を尊重すれば、減産さえ考えなければならない。資本主義で追求される能率主義も再考が必要である。労働集約型のエッセンシャル・ワークが重視されなければならない。……

こう見てくると、現在社会問題となっていることがクローズアップされていることを知る。自身も若い斎藤幸平は、直前の二十世紀社会のこともあまり知らない若い世代に、現代社会の抱える問題を歴史的にとらえるよう促している。

「脱成長コミュニズム」は、「物質代謝の亀裂を修復」し、さらに、気候変動・環境や資源の問題など、人新生が直面している文明崩壊の危機に立ち向かうために必要だ、とこの本は説く。この本が若い世代を動かして、将来に対するわたしの悲観的な見方が杞憂だった、と子や孫がふりかえることになるように願いたい。

2022 年 7 月大暑　　海蝶　谷川修